

五高新聞

第146号

発行：五島高校新聞部

絆

～橋の向こうへ

五島高校文化祭

『五高祭』

踏み出す一歩～

2014年8月30日・31日開催

八月三〇日、三十一日の二日間、『絆(わ)橋の向こうへ踏み出す一歩』というテーマのもと、五島高校文化祭「五高祭」が開催された。各文化部やクラスの展示を見て、私たちの間にある絆を再確認した。

企画、運営は五月に結成された五高祭実行委員会が行った。この二日間の文化祭を最高のものにするため

深まった絆

小さい頃から思い描いていた夢。しかし、それは叶わない事も少なくはない。それでも私たちはなぜ前に進むことができるのか。それは、私たちが目には見えない「絆」という大きな力に支えられているからではないだろうか。



五高祭を通じて

文化部は、日頃の活動の成果を全校や地域に示す年に一度の機会である。部誌を発行したイラストレーション部や、模擬試合体験を行った百人一首かるた部など、どの文化部も訪れた人を楽しませるような展示や発表をしていた。

各クラスも、8月中旬から準備を始め、絆というテーマに沿った劇や映像を、工夫を凝らして作り上

に、音響や映像など、さまざまな仕事をこなし、オープニングやエディングといったセレニーも担当した。

当日は、校舎内だけではなく、屋外特設ステージも設けられ、各クラスや文化部の展示や発表のほか、カラオケ大会などの催しが、学校全体で開かれた。

模擬試合をするかるた部

エンディングセレモニーでは、一年生の音楽選択者による合唱が行われた。練習ではなかなか声が響かないこともあったが、本番ではまとまった合唱を披露した。

実行委員会企画では、カラオケ大会や英語の例文暗唱大会である「天下一武道会」が開催された。今年が初めての取り組みとなる、天下一武道会では、各クラスの代表選手が日頃の英語学習の成果を発揮し、決勝戦では、三年五組の向井くんと二年五組辻くんが白熱した戦いをみせ、見事辻くんが優勝を果たした。



天下一武道会優勝者 辻 哲頭くん

そして、エンディングセレモニーの最後のグラウンドフィナーレでは、実行委員長の挨拶とともに、全校生徒が一人一文字ずつ書いた折り紙が、貼りあわせられ文章となったものが披露された。最後には舞台前に整列した実行委員による、お礼の挨拶で、今年の五高祭は閉幕した。

これからの五高生

「絆」というテーマのもと取り組んだ、今年の五高祭。協力して一つのものを作りあげる楽しさを学んだはずだ。五高祭をきっかけに再発見した「絆」を、これからも大切にしてほしい。(槻)



一年生音楽選択者による合唱

【インタビュー】

五高祭実行委員長

今年度の五高祭実行委員長を務めたのは、2年生の大村美優ジンさん。彼女の努力は大きい。そんな彼女に、五高祭終了後にインタビューを行った。

グラウンドフィナーレでの最後の一言「ありがとうございました。」を言い終えての感想を教えてください。

大村さん 無事に終わって良かったと安心しました。今年度の五高祭、成功しましたか？

大村さん 成功しました。実行委員長を務めての感想を聞かせて下さい。

大村さん 大きな団体の一



五高祭実行委員

番上に立つというのは、人生を通してなかなかないため、いい経験になりました。

後輩たちに對して来年度の五高祭をこういうものにして欲しいという願いはありますか。

大村さん 固定観念にとらわれずに、今までにはない新しい五高祭を作り上げてほしいです。

実行委員長を務めてみて、これからの生活に生かせそうなことはありますか。

大村さん 人に自分の意見を伝える時には、きちんと整理し、まとめてから伝えるということですね。いろんなことを曖昧にしまままではダメだということです。では、身につけた力は何か。

大村さん 人に頼ることを覚えられました。今までは一人で行動することがありましたが、仲間を信頼することは大切だと思いました。



実行委員長 大村美優ジン

来年度はまたさらに進化した五高祭が生まれるだろう。今年度の五高祭に向けて、時間をかけて頑張ってきた五高祭実行委員の皆さんに拍手を送りたい。(響)

感謝と誇り 制服から

今回我々新聞部は、制服の存在について考えてみたいと思う。

皆さんは制服についてどのような考えを持っているだろうか。またどのような気持ちでその制服を着ているだろうか。

私が以前訪れたカンボジアでは、学校へ行くこともできない貧困家庭の女性たちが働く工房があった。そこで働いている女性たちは

「おそろいの制服で学校へ通う子供たちが羨ましい」と言っていた。彼女らは一生懸命働き、おそろいのTシャツを手に入れた。彼女らは「今ではみんなその服を着て働くことがとても楽しい」と笑顔で語っていた。



も、明治三十四年六月に内務省から出された通達をもとに三年生以上が制服を着ることになった。

昭和四十九年にはすでに、現在と同じスタイルの夏の制服を着用していた。今日私たちが着用しているこの制服はとも歴史が深いものである。

学校へ行きたくても行くことができない。制服を着たくても着ることができない。そんな人たちがいる中で私たちは当たり前のように制服を着ている。しかし歴史の深いこの制服にも誇りと感謝を持っているのではないだろうか。また制服と同じように、私たちの周りにも物も当たり前だと思っはいけない。周りを見渡し、考えてもらいたい。

そうすればきつと自身の視野も広が

り、見えてくる世界が今とは異なってくるのではないだろうか。(野)



カンボジアの工房